

鈴鹿本『今昔物語集』一見の記

森 正 人

京都大学附属図書館から、平成8年度秋季展示会の案内をいただいた。思いもかけないことであったが、案内状に、鈴鹿本『今昔物語集』が平成8年6月に国宝の指定を受けたことを記念しての展示会であるよし記されていた。私が今昔物語集に関心を持つ一人であることを知ってくださったらしく、図書館と企画にあられた方々のはからいによるものであった。

鈴鹿家より京大附属図書館に寄贈された今昔物語集の写本は、全二十八巻のうちの九巻九冊を残すのみであるが、書写年代が鎌倉中期と判定されて他の本にくらべて格段に古いばかりでなく、現存諸本の祖本であることが明らかになっている、特別の本である。1996年1月に刊行した新日本古典文学大系（岩波書店）の注釈では写真に拠るほかなく、いつかは一見しなければならぬと思っていた。

展示期間中の11月15日(金)には、京都大学総合人間学部の西山良平助教授による「『今昔物語集』の〈構造〉と歴史学」と題する講演会も行われる。西山氏といえは、古代の王権と色好みの問題を日本史学の側から検討した意欲的な論文で、印象に残る方である。この講演も聴きたいと思った。折よく、翌16日には神戸女子大学で和漢比較文学学会の例会も開かれる。多用な時期ではあったけれども、出かけようと思いついた。

京大の図書館には、講演の始まる少し前に着いた。受付で目録を受け取るのももどかしく、鈴鹿本の前に立った。写真から想像していたより紙は古びても見えず、墨色も鮮やかである。虫食いの多い本であるが、きれいに裏打ち補修が施されていた。鈴鹿本の書写・伝来という問題に焦点を合わせた展示になっていて、本の喉（綴じ穴から背までの部分の紙）に書き入れのなされている箇所が抜けてあった。その書き入れは本来は見えないのであるが、現状は綴じ紐（こより）をはずして装丁し直されているので、つぶさに見ることができる。書き入れは、はやく鈴鹿本を調査した江戸時代の学者伴信友によって発見され、昭和に入って酒井憲二氏がさらに子細に調査して、鈴鹿本の伝来ひいては今昔物語集そのものの成立の場と背景を解く鍵になるとして注意を喚起し、20年ほど前に研究者の関心を集め、活発な議論のなされたことがあった。

1時間半に及ぶ西山氏の講演は、鈴鹿本に関する新しい知見を示されたほか、刺激に満ちたものであった。国文学の側の研究成果を批判的に紹介し、あわせて、今昔物語集を史料として用いる歴史学者の立場と視点をも検証するというかたちで、今昔物語集の世界の問題性が面白くかつ鋭く語られた。

講演が終わって、展示室に多くの人が移動した。鈴鹿本の展示棚の周囲は一時人だかりがして、近づくことができない。そこで、先ほど見るいとまのなかった他の展示品を眺めることにした。清原家文庫の本が目についた。抄物のほかに、複製で知っている孝子伝などもあった。

閉室の30分前、人影がまばらになって、ようやく静かに鈴鹿本と向き合うことができた。卒業論文を書こうとして日本古典文学大系で今昔物語集を読みはじめた頃、その口絵に載せてある写真の数葉に何度か見入ったことがある。当時の私にとって、鈴鹿本ははるか遠いところにあった。その頃から20余年、この作品のために費やした多くの時間をしみじみと思った。しかし、この本が国宝ということになれば、今日の前にあっても、もっと遠いところに行ってしまったのかもしれないと思った。

先に述べたように、鈴鹿本には喉の部分に5箇所の書き入れがある。そのうちの4箇所は、総六丸という人物が一見した旨の書き付けで、本文とは別筆と認められる。鈴鹿本の本来の装丁は袋綴じで、料紙を二つ折りにして綴じられていたわけであるが、それらの書き入れは、すべて紙の左端すなわち二つ折りにされた紙の裏の端、綴じ穴の外側にある。巻第十二第42紙の「一見了 総六 十九」という書き入れの部分が抜けてあった。よく見ると、次の第43紙の表の右端の同じ高さのところに、つまり対称の位置に墨の痕がある。「十九」の裏文字のように見えるから、第42紙の文字が写ったのであろう。気づいて、私は軽い興奮をおぼえた。このことは、鈴鹿本が綴じられていない状態で書き入れがなされ、二つ折りの第42紙に二つ折りの第43紙が重ねられたという事情を物語っている。総六丸の「一見」書き入れは、点検作業の心覚えとして鈴鹿本が綴じられていない状態でなされたこと、すでに酒井

憲二氏によって推定されていたが、これはその裏付けとなるであろう。

さらに、第42紙に眼をこらすと、「九」のすぐ下の位置にも墨が薄く付いている。第43紙の「九」の裏文字の一部と形がよく似ているから、第43紙の墨がまた第42紙に付着したのではなからうか。そうであるなら、第43紙は第42紙に重ねられた直後に、ずらされたということになる。この想像が当たっていれば、書き入れが綴じられていない状態でなされたことの明徴となるのではないか。ただし、そのことは、鈴鹿本が綴じられる以前の段階であったことをただちに意味するものではない。綴じ糸が切れた状態、あるいははずされた状態であったかもしれない。

このような想像を楽しむ一方で、鈴鹿本の姿の些細な箇所に着目する自分に苦笑を禁じえなかった。これは、すべてガラス越しの観察にもとづく、粗い推測にすぎないではないか。鈴鹿本を手にとって調査された方々はすでに気づいていらっしゃるであろう。いずれにしても、綴じ穴の位置、書き入れの文字の位置と形、墨の汚れの位置と形とが計測・照合されて後、確かめられるべきことである。

こうして、私は感傷と愉快的興奮を自嘲に包んで展示会場をあとにした。その感情を整理する気にはなれなかったので、京都に行くに必ず酒を酌み交わすことにしている友人にも電話せず、大阪の宿に向かった。

(もり まさと 文学部教授 国文学)

熊本大学附属図書館寄託 永青文庫の貴重書 (四)

細川幽齋『九州道の記』一巻

荒木 尚

今年にはNHKの大河ドラマ「秀吉」にちなんだイベントが多かったという。そこで、今回は幽齋と秀吉との関係を追いながら資料をたどることにしたい。

天正13年(1585)4月、幽齋は秀吉から在洛料として、かつての所領地であった西岡勝竜寺一帯に三千石を与えられた。この13年ごろには、幽齋は秀吉の動向にあわせて行動することが多く(『兼見卿記』)、二人の間に親密な関係があったらしいことが知られる。秀吉は天正13年7月関白職につく頃から、文化に対する関心が強まったようである。14年には2月に、15年の末から翌16年にかけては、連続して連歌会を興行し、また出席している。そしてその連歌会の連衆のなかには、いつも幽齋が加わっているのである。文化的上昇を志向する関白秀吉にとって、幽齋はきわめて有用な存在であったにちがいない。幽齋は古今伝授の相伝者として当代歌壇の第一人者であり、その文事は文学領域のすべてに及んでいたから、そのような幽齋を側近く伺候させることによって、秀吉自身の文化的権威づけと満足感を充足させることになったと思われるからである。

天正15年の3月、秀吉は島津氏・大友氏の抗争をとどめるべく九州へ遠征した。幽齋の嫡男忠興ただおきも従ったが、幽齋は無為の丹後在国を憚って、秀吉の出陣から1月余り遅れて海路出発した。その時の細川幽齋の紀行文が『九州道の記』であり、その善本(卷子本1

巻)が永青文庫に所蔵されている。法体ほつたいになった幽齋は、戦力として合戦に参加するわけでもなく、秀吉の陣中見舞くらしいの悠長な下向であった。途中、名所旧跡に親しみ、俳諧即興の和歌・連歌を詠み、秀吉と同席しては風流韻事を楽しむ雰囲気めいひのたまが記されている。天正15年6月の記事を引いてみよう。→[I]

8日、陣中に供奉して福岡の姪浜めいのはまにいた千利休(1522~91)の宿所に秀吉がやってきて、連歌一折を所望し、幽齋が求められて発句はつくを詠んだ。発句は当座の賓客が詠むもので、季語を具え、格調のある挨拶性が要件とされる。一座における幽齋の地位のほどが知られよう。幽齋は、笹崎はこざき八幡宮やしろの標の松に秀吉(松)を寓して、和平を実現させた功績を称える挨拶の句とした。季語は「涼し」で夏。続いて脇句を「松」(秀吉の一字名)が付け、日野中納言輝資が第三句を継いでいる。秀吉の在所となった八幡宮境内では、幽齋は請われて、標の松によせた祝言の心を詠進した。戦いをやめて剣をこの武神のもとに納めなさい、箱崎の千年の松もわが君の代の友であるから、と秀吉の戦勝をことほいでいる。

次の[II]は、6月25日と27日の記事である。宗易(利休)からよこされた歌「あまざかる鄙ひなの…(都を離れた地方の住いと思うなかれ、どこも同じ浮世ではないか)」に返事して、幽齋は「あまざかるひなには…(都を離れた地方にはやはり居たくないよ、どこも同